

## 柴田南雄音楽評論賞選評

海老澤 敏

財団法人アリオン音楽財団がおこなっている音楽祭 東京の夏 は毎年異なった主題を中心にユニークな発想にもとづく異色なプレゼンテーションによって注目を集めている。そのフェスティバルともけっして無縁ではないが、別の観点から、またきわめてユニークな試みとして注目される財団の事業は 柴田南雄音楽評論賞 である。そのユニークさの一つは、この場合、唯一性(ユニークネス)とも言うべきもので、これはいくら評価し、賞賛してもし過ぎることはないだろう。演奏家や作曲家といった、いわゆるプラクティカル・ミュージシャンの才能の発掘、発見、そしてその顕彰の機会、まさに枚挙に遑がないほど多く、また多様、多彩であるが、一方でそうした音楽の実践活動を準備し、支援し、あるいは価値判断し、歴史の中に位置づけさえする研究者や評論家の活動が顕彰の対象となることは大変稀であることも現実なのだ。そうした状況の中で、実践活動の世界でも、また理論活動の領域でも、きわめて質の高い音楽活動を長らく続けられて逝った故柴田南雄の名を冠したこの音楽評論賞は、そのユニークネスで光り輝やいている。

隔年におこなわれるこの音楽評論賞の今回の応募者は、前回(2000年度)に比べて1名増の合計9名であった。そのうち女性が1名という実態は、前回は指摘したように、女性が圧倒的に優位を誇る音楽界では珍しい現象と言うべきだろう。音楽評論もまた音楽活動として位置づけられるべきだという筆者の考えが一般的に認められればの発言ではあるが、今回とりわけ目立ったのは音楽大学系の学歴を持った応募者がひとりだけ、それも最終学歴は一般大学(大学院在学中)、それに音楽学や音楽評論に関係深い美学系の専攻者もまたひとりだけという結果であった。年齢層は50歳台がひとり、40歳台が2人、30歳台が4人、そして20歳台が2人であった。

コンサート評については、第18回 東京の夏 音楽祭 2002 の演奏会の評はハンス・ツェンダー版(冬の旅)がもっとも多く5名、オリジナル版(冬の旅)が4名、アイギとグバイドゥリーナの出会いが3名、(イノック・アーデン)も3名、文学が音楽を生む風景、ブルーストの音楽を求めて、ブルネロ&アファナシエフの三つは1名が取り上げていた。評論については、それぞれが取り組んだ主題は多様で、スカルラッチィ(ドメニコ)、ブルックナー、リストとグールド、柴田南雄と武満徹、そしてフルトヴェングラーといった作曲家や演奏家が論じられたほか、ピュタゴラス、アドルノに関する論稿、そして聴衆論が提出された。

選考委員諸氏の評価はかなり厳しい。さまざまな観点から、意図や視点の明快さが問われ、安直さ、杜撰さ、思い込み、説得力の不足、短絡さ、展開力の欠如などが次々と指摘され、賞候補から外されていく。かと言って、ただひたすら厳しく、冷酷な発言ばかりが目立った訳でもない。感性、努力、捉え方の面白さ、比較論の着想などの好意的な発言もなされて、応募者諸氏の今後の精進も期待されたものであった。

こうして、最後に残されたのが、演奏会評としては プレガルディエンが歌う(冬の旅)、ブルネ

ロ&アファナシエフ 十五年ぶりの共演、それに 中村和枝のピアノ接近物語 と扱い、評論としては「松平頼則が残したもの」を書いた石塚潤一氏のものであった。若干の論議をご紹介しておこう。一方ではこの論稿は、作曲家研究としては評価できるが、音楽評論、時評といったこの音楽評論賞の主旨からはすこしずれているといういささかネガティブな論評がある一方、音楽学的な作曲家研究であれば物足りないが、松平頼則を見直す価値がある存在と主張する時評としては悪くないものだとする意見も出された。氏のコンサート評、評論のいずれもあるレベルに達しており、後者については綿密な調査にもとづき、判断も適切だとの評価が大方であった。日本語の表現力も他の論稿に比べて優れているとの評価を加えても、本賞には残念ながら今一步との判断が委員諸氏の間で一致し、奨励賞 授与が決定した。

その石塚氏の論稿は、今日の奨励賞授与式で列席の皆様のお手許に配布される。その論稿にいささかの注釈をつけ加えることは不要であろう。そこで、筆者は、筆者がこの 柴田南雄音楽評論賞 の選考委員の一人として、選考の折にも、そしてまたあらためてこの論稿再読の機会を得て、選評 を執筆する前にも感じた印象の一端のみを記しておこう。

ひとりの作曲家の生涯の軌跡は、その作曲家が残した作品たちの響きの中にこそ、もっとも純粋なかたちで刻み込まれている。それを掘り出すことが、音楽研究の重要な課題であり、作曲家の作品研究のみならず、伝記研究も、最終的にそこに関わらざるをえない。筆者が自分の専門のモーツァルト研究に即して ミュージカル・バイオグラフィー、あるいは筆者の造語では オペログラフィー と呼ぶ研究方法であり、作曲家の魂の内奥に迫る唯一とも言うべき道なのだ。石塚氏のこの論稿は、氏がそうした作曲家への接近の、そしてその作曲家の作品たちの解明への王道を歩みつつあるかに窺えるのだ。だが、この王道を歩むには、およそ想像しえぬほどの労苦と、そして時間とが必要であろう。対象をひとつ松平頼則に限らずとも、そうした試みに是非挑戦してもらいたいものである。

松平頼則氏に関して言えば、このまこと長寿の一生涯を飾るご自身の創作活動へのオマージュの一つが、ザルツブルク国立音楽演劇大学が主催する《詩学(ポエーティク)》講座へのご出講であったことをご紹介しておきたい。それは1996年5月6日~17日におこなわれ、立派な講演CD集として刊行されている。(Hochschule für Musik und darstellende Kunst "Mozarteum": Poetik, Gastvorträge Portraitkonzerte Unterricht Lesungen. Yoritsune Matsudaira. 6.-17. Mai 1996)

なお、この音楽評論賞選考委員会の席上で、今後の課題について話し合いがおこなわれた。その中で指摘されたひとつの重要な問題は、音楽批評や音楽評論の発表の場きわめて少ない点であった。新聞は十分なスペースを確保できないし、評論が登場する音楽雑誌も廃刊や収載エッセイや記事のポピュライゼーション等によって、およそその場が皆無に近いのが昨今の事態である。

もう一つ、音楽の、そしてとりわけ音楽学の学徒の応募が少ないこと。今回も全体的に音楽の専門的、技術的知識を踏まえての論議が少ないか、底が浅いこと。この点では、音楽大学、芸術大学系の学徒の奮起を大いに期待したいとともに、かつてはアウトサイダー視されていた一般大学からの学徒の、一層の音楽研究面での修練を切望したいものである。